

機関番号：12601
研究種目：特定領域
研究期間：2005～2009
課題番号：17083003
研究課題名（和文）東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生
研究課題名（英文）Maritime Cross-Cultural Exchange in East Asia and the Formation of Japanese Traditional Culture
研究代表者
小島 毅 (KOJIMA TSUYOSHI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：90105719

研究成果の概要(和文):特定領域全体を統括するために、総括班事務局は東京大学に設置され、領域全体にかかわる各種の書類やニューズレター(「青波」)をはじめとする印刷刊行物の作成、ホームページの管理と更新、対外的な連絡・折衝を担当した。また、個別計画研究の活動において科研費が適正に使用されているかを内部から監視し、不適切な支出行為が生じることを未然に防止することに効果をあげた。

研究成果の概要(英文):To supervise this entire project, this “general group” was located at the University of Tokyo. It worked in the management of the project including creation of various documents and printed materials including Newsletters “Blue Wave”, management and updating of the WEB page, communications and negotiations with outside organizations. In addition, we also conducted internal auditing in order to assure that each group is spending the allocated Grants-in-aid properly for their activities and to prevent any unjustifiable expenditure from occurring.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	17,200,000	0	17,200,000
2006年度	29,800,000	0	29,800,000
2007年度	26,700,000	0	26,700,000
2008年度	26,100,000	0	26,100,000
2009年度	39,500,000	0	39,500,000
総計	139,300,000	0	139,300,000

研究分野：中国哲学

科研費の分科・細目：特定領域

キーワード：東アジア、海域、日本文化

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究計画は、もともと宋代史研究会の研究報告集第6集「宋代社会のネットワーク」および第7集「宋代人の認識—相互性と日常空間」(いずれも汲古書院刊)の編集作業に始まった。その作業を通じて、参加者の間で狭義の宋代史研究の枠組みを超え、また海外の研究者との密接な連絡・協力を通じて斯界の発展に務めることの必要性が認識された。そこで、1999年3月に東京大学を会場としたシンポジウム「宋代史研究者から見た中国史研究の課題」を開催し、明清時代についての研究者や、日本・西洋・西アジアを研究対象とする人文学の研究者、および社会学者にもパネラーとして参加してもらい、活発な意見の交換をおこなった。その内容は『知識人の諸相』(伊原弘・小島毅共編、勉誠出版)として2001年5月に出版された。

(2) こうした取り組みは外部機関から高い評価を得、国際会議での研究発表を行うことにより成果を世界に示すことができた。すなわち、東方学会の支援と、2つの財団助成金(鹿島学術振興財団・三菱財団)を得て、2000年夏にモンテリオールで開催された国際アジア北アフリカ研究者会議(ICANAS)に本プロジェクトから10名が参加、独自にパネルを2つ組んで世界中から来ていた学会参加者たちと意見交換をした。

(3) そうした中で、寧波を焦点とする大規模な共同研究計画が立案された。2003年秋にはそのための企画調査として科学研究費補助金基盤研究(C)(1)を申請し、採択されることで、本特定領域の研究計画が具体化した。

2. 研究の目的

(1) 本特定領域は、東アジア海域における人的・物的交流の歴史を多分野横断的に分析し、日本の伝統文化形成過程を再検討することを目的とした。具体的には、中国大陸において東シナ海に面する中核的港湾都市とし

て栄えた寧波を焦点に、歴史的存在として不断に変化する大陸文化がそれぞれの時点においてどのように日本に伝来し、どう影響を与え、どう変容してきたかという問題について多角的な検討作業を遂行した。

(2) 領域名称に用いた「海域」とは、海を媒介とする関係性を持つ地域である。フランスの歴史学者F. ブローデルはその著『地中海』において、時間を地理的時間＝長期、社会的時間＝中期、個人的時間＝短期、空間を中核・半辺境・辺境に分け、地中海世界をこれらの三層構造からなる1つのシステムとして描いている。本領域研究もこの構想到に影響を受けたものであるが、彼の研究が経済・社会分析に偏りすぎており、人々の心性や政治の問題を十分に分析していないことや、中核・半辺境の交代の歴史であった地中海世界とは異なり、東アジア海域は一貫して中国が中核の役割を担って維持される世界であったことなどに鑑み、当該海域から発信する新たな海域論の構築を意図した。

(3) 如上の海域交流を国家間の次元ではなく、よりミクロな地域に視点を据えて見ることも、本研究計画の斬新な点である。東アジアの交流史は「冊封体制論」のように従来ともすれば「中華帝国とその周辺諸国」という国家の枠組みで語られる傾向にあった。東アジア諸国は強固な中央集権専制支配を実現しているように見えたからである。しかし、その支配の実像については近年西アジア史研究の成果などを取り入れた見直しが進んでいる。本研究計画では、こうした新傾向をふまえ、「国家」ではなく「地域」に着目して交流の諸相を明らかにしようと試みた。寧波あるいは浙江地方がここでいう「地域」に

あたる。本領域研究では、海を国境として地域間の障壁と見るのではなく、海が多く地域を相互につなぐ役割に注目していくことを課題とした。

(4) 全体から見た必要性によって34の計画研究班を設け、そのそれぞれが日本の伝統文化形成を東アジアという広域的な場の拡がりから考察することをめざした。「日本」も国家の単位であり、地域単位で眺めてみれば古来多様性を持っている。それが統合されて表象されるにいたる経緯において、一方では捨象される地方文化もあった。いわゆる日本文化を、日本という単位固有のもののみならず、各地で歴史的に形成された産物として見る視点を実証的に確立することによって、今後の日本文化のあり方への展望を切り開くことを意図したものである。

(5) こうした目的を達成するため、本研究計画には人文諸学を中心に自然科学や社会科学まで含むあらゆるディシプリンの研究者が参集し、日本の学界全体のこれまでの業績を全面的に継承し、今後の学術研究全般が進むべき道筋を提示することを目標として掲げたのである。

3. 研究の方法

総括班として実施した主要業務は、ホームページを開設して逐次情報の提供に務めたほか、ニューズレターや各種冊子類を発行して成果の公表であった。なお、これらについては、英語版や中国語版も翻訳作成している。特に、一般社会への成果の還元に積極的に取り組み、参加費無料の公開講演会や市民セミナー等を独自に企画してわかりやすく研究内容を発表するほか、展覧会の企画・運営も

推進していくことを当初より計画し、総括班経費を使用することで以下の企画を実現した。

4. 研究成果

総括班は研究自体を遂行する組織ではないため、総括班独自の研究成果なるものは存在しない。総括班経費を使用することで実現した企画を以下に列記してこの項目に該当する内容としたい。

国際シンポジウム「東アジアからの東アジア文化史——共同研究の手法」

2006年2月5日(日)

東京大学数理科学研究科

中国社会科学学会大会シンポジウム「科举からみた東アジア—科举社会と科举文化」

2006年7月9日(日)

東京大学文学部

夏季セミナー「東アジア研究の新手法」

2006年7月18日(火)～21日(金)

東京大学文学部

国際シンポジウム「歴史学の手法を問う—東アジア学の方法論構築に向けて—」

2006年7月24日(月)

大阪市立大学学術情報センター

国際シンポジウム「中国社会における変容と変貌、そして持続の論理の模索—思想と社会の実態」

2007年5月18日(金)

日本教育会館

中国社会科学学会シンポジウム「都市と建築

ー流動する人々、生成する権力」

2007年7月8日(日)

東京大学文学部

にんぷろワークショップ2007

2007年7月21日(土)・22日(日)

九州大学西新プラザ

東方学会会員総会シンポジウム「都市・墓・
環境をめぐる歴史的空間ー文理融合による
日中比較」

2007年11月9日(金)

日本教育会館

第8回平泉文化フォーラム

2008年2月2日(土)

奥州市文化会館

市民セミナー「東アジアの中の鎌倉——世界
遺産への道」

2008年4月19日(土)

鎌倉女子大学図書館

夏季セミナー「東アジア海域交流の中の五山
文化」

2008年8月25日(月)～28日(木)

同志社大学溪水館

国際シンポジウム「東アジア海域史研究の課
題と新たな視角」

2008年11月15日(土)・16日(日)

国民宿舎みやじま杜の宿

第9回平泉文化フォーラム

2009年2月7日(土)

平泉小学校

公開ワークショップ「朝鮮文化と日本ー数
学・書籍・美術ー一つの事例から」

2009年4月26日(日)

仙台市博物館

東方学会会議シンポジウム「近千年の中国に
おける大地と社会の変貌——自然・景観・人
口・交流などを中心として」

2009年5月15日(金)

日本教育会館

国際シンポジウム「舍利と羅漢ー聖地寧波を
めぐる美術ー」

2009年8月8日(土)・9日(日)

奈良国立博物館講堂

国際シンポジウム「東アジアの海域交流——
琉球という視点から——」

2009年12月12日(土)

沖縄県立博物館講堂

5. 主な発表論文等

総括班は研究自体を遂行する組織ではないため、総括班独自の研究成果なるものは存在しない。総括班の経費を用いて作成した各種印刷物(シンポジウムの予稿集、研究報告冊子など)も、その内容が総括班にかかわるものではないので、ここには列記しない。ただ、すでに平成22年3月において作成して文部科学省宛に提出した冊子体の研究成果報告(個別計画研究の研究成果内容報告)と、これに続いて領域の研究全体を総合して公表している「東アジア海域叢書」(全20巻予定)のなかの既刊分のみを記入する。

[図書] (計2件)

1. 研究成果報告書 (2010年3月)

第1分冊 575 ページ

第2分冊 683 ページ

第3分冊 636 ページ

第4分冊 596 ページ

第5分冊 451 ページ

第6分冊 523 ページ

2. 東アジア海域叢書 (既刊分4巻、汲古書院、2010年10月～2011年3月)

監修 小島毅

(1) 『近世の海域世界と地方統治』 426 ページ

(2) 『海域交流と政治権力の対応』 399 ページ

(3) 『小説・芸能から見た海域交流』 328 ページ

(4) 『海域世界の環境と文化』 313 ページ

[その他]

ホームページ

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/maritime/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小島 毅 (KOJIMA TSUYOSHI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：90195719

(2) 研究分担者

板倉 聖哲 (ITAKURA MASAOKI)

東京大学・東洋文化研究所・准教授

研究者番号：00242074

横手 裕 (YOKOTE YUTAKA)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：10240201

齋藤 希史 (SAITO MARESHI)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：80235077

河澄 響矢 (KAWAZUMI NARIYA)

東京大学・大学院数理科学研究科・准教授

研究者番号：30214646